

# 続・医史学における複言語主義のすすめ

泉 彪之助

介護老人保健施設 陽翠の里

受付：平成20年2月4日／受理：平成20年4月24日

前稿で<sup>1)</sup>、医史学において研究の武器として複言語主義をすすめることをのべた。ここでは、その複言語主義を実際に応用して史料や文献を検討する場合の問題点を述べたい。いうまでもなく、これは個人的な経験・見解に過ぎないので、詳しくはそれぞれの分野の専門家に伺っていただきたい。

## 1. 言語のいろいろな側面

### (1) 国と言語

英語、ドイツ語、フランス語といった風に、私たちは一つの国では単一の言語が話されているように思うが、それはむしろ例外的で、複数言語が話されているのが普通である。スイスでは、ドイツ語、フランス語、イタリア語、レトロマン語(ロマンシュ語)の四つの言語が話されているし、スペインでは、カスティリア語(スペイン語)、カタルーニャ語、ガリシャ語、バスク語の四つが話されていたが、一九九〇年になってアラン渓谷の言語も認められるようになった<sup>2)</sup>。こうした異なった言語を話す人々がお互いによく交流しているのは、ヨーロッパではルクセンブルクだという。反対に二つの言語が対立し合っているのは、ベルギーである。ベルギーでは、オランダ語の系統の南ネーデルラント語(いわゆるフラマン語)とフランス語が話されているが<sup>3)</sup>、政府が三つ(フラマン語地域、フランス語地域、両言語が話されているブリュッセル)あり、教育機関や観光協会が二つに分かれている。ヴェサリウスが学んだルーヴァン大学も、最近フランス語で教育する大学が分かれた。

### (2) 言語の地域的変異

上の問題と関連するが、言語の境界と国境とは同じではない。

教室で言語を学ぶと、一つの標準的な体系があると教えられ、それから離れると間違いだといわれる。しかし実際の言語ではそのようにならない。

古典ギリシャ語のように、標準的な言葉がない言語も決して珍しくはない。国や公的機関が言語を規定しているのは、どちらかというに限られた地域である。言語アカデミーがあってそれが言語を規定しているのは、フランスとスペインだけだという。スペイン語では、疑問文の文頭に疑問符をさかさまにしてつけるが、これはスペイン・アカデミーの勇み足だといわれる。

方言というと、標準語から離れた、乱れた言葉と考えられそうだが、実際は地域的な特性を持った言語であり、方言が言語の大きな部分をなしている。私たちは日本人で日本語を話しているとされるが、日本語の標準語は東京を中心とした言葉から来ており、それぞれの土地で別々の言葉が使われている。関西弁や鹿児島弁、東北弁も立派な日本語なのである。私の友人のアメリカ人宣教師は、仕事柄、日本のいろいろな土地に住んでいたが、私に「地方から東京へ帰ってくると、言葉がよくわかるのでほっとする」といっていた。こうした言語の幅の広さは、どの土地にでもあることで特別なことではない。

### (3) 言語の時間的変異

言語は、時代によって変わる。日本語を例にとると、万葉集、中世女流文学、中世戦記文学、江

戸時代の擬古文、国学者の文章、読み本の言葉などが、相互に異なっていることはだれでも理解できるだろう。明治時代から昭和の始めにかけて、日本語は、和文脈、欧文脈、漢文脈と三種類あった。現代の日本語も変化しつつあり、たとえばいわゆる「ら抜き言葉」は日本語として定着しつつある。メール用語なども、変化のうちにはいるだろう。こうした時代的な変化は言語によって異なっており、歴史的変化が少ない言語と変化が著しい言語とがある。

アラビア語は、コーランの言葉は一語も変えてはいけないとされる。そのため、アラビア語のフスハー（正則語）には時間的な変化がない。しかしアラビア語には、各地方によって異なるアンミーヤ（地方語）があり、これには時間的な変化もあるはずである。

ヘブライ語は、もともと旧約聖書の時代の言語だが、十九世紀に現代語として復活し、そのため時間的な変化は少ない。飛行機やコンピュータのような、旧約聖書の時代にはなかった言葉は作られたが、私たちが旧約聖書を読んでもなんとかわかる程度である。

スペイン語は、中世スペイン語、古典スペイン語、現代スペイン語と変化し<sup>4,5)</sup>、もっとも古い文献が「エル・シッドの歌」(Cantar de Mio Cid)<sup>6)</sup>だが、「エル・シッドの歌」は、現代スペイン語を学んだ私たちにも少しはわかる。

これらに対し、中国語は歴史的な変化が大きく、少し古い文章は現代中国語の知識では理解できない。

#### (4) 文字と発音の乖離

英語の定冠詞をゼと読む人は、だれもいないだろう。英語はknightやdaughterのように、文字と発音の乖離がはなはだしい言語のひとつである。いろいろな言語でそれぞれの発音法があり、文字の読み方も一様ではない。本来の言語がローマ字で書かれていても、その読み方は、決して日本人が本来の音と考える音ではない。以下は、私の知るほんのいくつかの例である。

(a) アラビア語やヘブライ語のようなセム系の

言語には、もともと母音を示すアルファベットの文字がない。とくにアラビア語は、文法的な変化が発音に影響して、文字が変わらないのに読み方が変わってくる。また会話では、語末の格変化による発音は省略されるのが普通である。

(b) 中国語のピンインはローマ字で書かれるが、決してローマ字の発音と同じではない。むしろ中国語の発音を表すために、ローマ字の近似音を借りたという方が正しいだろう。dt, bp, jqは濁音、清音でなく、無気音、有気音で、中国語には濁音がない。そのことは中国語に独特の美しさを与えている。

魯迅をピンインで表記するとLuxunとなるが、発音はルーシェンではない。後のuは実はüの省略形で、正しい発音はルーシェイン（京大人文科学研究所の表記に従う）である。

#### (c) 母音の発音

ロシア語：oという字は、アクセントのない場合はアに、アクセントがある場合はオに発音される<sup>7)</sup>。水(водá)はヴァダーであり、これに縮小字がついたいわゆるウオツカ(водка)はヴォトカである。

カタルーニャ語：eという字の発音は英語の定冠詞と同じく、əである<sup>8)</sup>。だから人名のArnau de Vilanovaの発音は、アルナウ・ダ・ピラノバとなる(ピラノバの表記の理由は後述)。画家のJoan Miroは、カタルーニャ人なので、名がカスティリア語(スペイン語)のJuan(ホアン)でないことは理解されてきたが、カタルーニャ語のアクセントのないoという字はウと発音されるので<sup>8)</sup>、ジョアン・ミロではなくジュアン・ミロだという。

オランダ語：uという字の発音はyで<sup>9)</sup>、だから地名のUtrechtはユトレヒトである。

#### (d) 子音の発音

ラテン語：vの発音はwである。森鷗外が、vita sexualisをキタ・セクスアリスと書いたのはこのためである。

ドイツ語：ラテン語と逆に、wの発音はvである。映画『第3の男』の中で、アメリカ人のホリーが「ドクター・ウインケル」と呼んで、「ヴィン

ケル」と直されるところがあるが、このことによる。

スペイン語：カタルーニャ語も同じだが、vの発音はbである。この差はかなり早くから起こっていたようで、Sevillaの発音は昔からセビリャであってセヴィリャではない。最近ではセビージャと呼ばれる。スペイン語のllaの発音は、私がスペイン語をかじり始めた40年ほど前は、スペイン本国ではリャと、南米ではジャと発音されていたが、現在ではスペイン本国でもジャと発音されるようになった。

イタリア語：赤白血病の最初の記載者はGuglielmoという名だが、このglはljに近い音なので<sup>10)</sup> グリエルモである。

#### (e) 子音と母音：

カタルーニャ語：カタルーニャでアラブ医学の文献が初めて翻訳されたのがLipollの修道院だが<sup>11)</sup>、この発音はリポイで、有名な哲学者Ramon Lull<sup>12)</sup>も、発音はラモン・リュイである。

#### (f) 固有字の発音：

チェコ語：交響曲「新世界より」の作曲者Dvořákの読みは、チェコ語特有の文字řが用いられているので、そのままでは読めない。一般にはドヴォルザークと呼ばれるが、本当の発音はドヴォジャークに近いという<sup>13)</sup>。これらの言語は、それぞれの言語の発音体系を理解すべきであろう。

### (5) 教科書的な言語と実際に使われる言語

“Bess, you is my woman. You is, you is.”

こんな英語を書いたら、どんな先生でも落第点をつけるだろう。しかしこれはアメリカを代表する歌劇、ガーシュインの「ボーギーとベス」の一節である。

言語は、このように教科書的な言語と実際に用いられる言語とある。かつてはこのような、たとえばいわゆる黒人英語は、文法から外れた英語として否定される傾向だったが、現在ではそれを実在する言語として認めるのが普通である。外国語を学ぶ場合、教科書的な言語を学ぶことになるだろうが、医史学的研究の上で実際に遭遇する言語

は、文法に沿ったものとは限らない。綴りも、辞書に書かれているそれとは異なっている場合がある。ヴェサリウスの旧姓をWitincxと書いている文献があるが、これはフランス語でusをしぼしば略してxと書く、民衆の慣用<sup>14)</sup>から来たものである。

教科書的な言語でも、たとえば英語でspoken Englishとwritten Englishとは明らかに別だが、文章はできるだけ平易な言葉で書くという英語特有の方針もあって、このことはあまり意識されないようである。

### (6) チョムスキーの言語理論

チョムスキーの言語理論を説明しておきたい。ノーム・チョムスキーはアメリカの言語学者で、最近よく政治・社会的な問題について発言している。その言語理論は、生成文法あるいは変形生成文法と呼ばれ、人間の中に言語の元となるものがあり、それが条件によっていろいろな言語として現れるというものである。この考え方は受け入れる人と、反発する人とがあるらしい。

チョムスキー自身の発言<sup>15)</sup>を読むと、人間の中にある、言語の元となるものはずいぶん複雑な成り立ちらしいが、私たちはそこまで詳しくなくてもいいだろう。

## 2. 医学用語の語学的誤り

恩師の故久留勝先生は、講義のときにいつも、appendicitisという言葉はappendixというラテン語にitisというギリシャ語の語尾をつけた、語学的に誤った病名だといっておられた。私も、サラセミア<sup>16)</sup>、ヘモフィリア<sup>17)</sup>という病名が誤りだと書いたことがある。

医学用語には、語学的な誤りが非常に多い。そのことは医史学研究の上で意識されるべきであろう。詳しいことは、“Hybrid words in medical terminology”<sup>18)</sup>という文献があるので、それを参照されたい。

## 3. 外国語の辞書

最近では電子辞書やパソコンの外国語自動翻訳機

構などの影響で、辞書・辞典の購入者が減っているというが、外国語を学ぶのに辞書は絶対に必要である。以下外国語の辞書についてのべたい。

今私が持っている辞書と単語集は、下記の25の言語である。

日本語、ギリシャ語、ラテン語、アラビア語、ペルシャ語、ヘブライ語、イディッシュ語、ユダヤ・スペイン語、英語、ドイツ語、オランダ語、フランス語、古フランス語、オック語、スペイン語、カタルーニャ語、ポルトガル語、イタリア語、中国語、韓国・朝鮮語、トルコ語、ロシア語、ポーランド語、アラム語、エスペラント語

これらのうち、日本で辞書・単語集が出版されていないものは古フランス語だけである。それだけ語学学習の幅が広がっているということだろう。この他にも、多くの言語の辞書や入門書(多くは語彙集が付属している)が日本で出版されている。

辞書の大きさを私が勝手に分類すると、叢書型辞典、超大辞典・大辞典、中辞典・小辞典、豆辞典、単語集などとなる。

叢書型辞典は、複数の冊数からなる辞典で、オックスフォード英語辞典、グリムのドイツ語辞典、わが国が誇る諸橋徹治の大漢和辞典などである。オックスフォード英語辞典は、電子版があるというが私は使用経験がない。こうした辞典は大きすぎて私たちにはあまり縁がないようだが、必要な場合がある。私がペッテンコーフェルの伝記<sup>19)</sup>を読んでいたとき、Tageswerkという言葉が出てきた。文字通り訳せば「一日の仕事」だが、それでは意味が通らない。日本で出版された大辞典には出ておらず、グリムを参照して、これがあの労働単位だということがわかった。

超大辞典は私の勝手な分類だが、大辞典のうち、とくに言語の基本となる辞典である。Liddel-Scottのギリシャ語辞典<sup>20)</sup>、オックスフォード・ラテン語辞典<sup>21)</sup>、スペイン・アカデミーの出版したスペイン語辞典<sup>22)</sup>などがこれにあたる。英語の辞典はいろいろな種類があるので、ウェブスターの英語辞典や小学館ランダムハウス英和辞典<sup>23)</sup>などがある。大辞典は語彙数の多いもので、わが国で

出ているもっとも詳しい辞典は、このレベルのものが多い。

中辞典・小辞典：書物を読むのもっとも使いやすい。ただし少し詳しいことを調べるには足りない。普段このレベルのものを使っていて、必要な場合大きな辞典を調べるのがよいであろう。日本におけるオランダ語の辞典の歴史を調べると、大辞典のドゥーフ・ハルマが有名だが、実際に使ってみると使いにくく、オランダ語の普及には中辞典『訳鍵』がもっとも有用であった<sup>24)</sup>。

単語集：言語が特殊で、辞書の使用頻度が限られる場合に出版される。イディッシュ語、ユダヤ・スペイン語、アラム語、オック語など。

ただし辞書の有用性は大きさに限らない。ある中国語辞典<sup>25)</sup>は、小さな辞書だが古典を読むには有益であると、中国語の先生から教えられた。

### (1) 辞書の引き方

普通は、動詞の変化形などをのぞき、語をそのまま引けば日本語訳が見つかる。しかし中にはそうしただけでは引けない場合がある。

(a) ギリシャ語の動詞、ラテン語の動詞の多くは、辞典に一人称単数現在形で掲載されており、不定法ではない。たとえばギリシャ語の「流れる」の不定形はrein(ローマ字で表記)だが辞書にはreōという形で出ている。

(b) 中国語の辞書は、ピンインつまり発音で引くことになっており、字の発音を調べ、それから引かなければならない。

(c) 普通は単語の語頭は変化しないので、それから辞書が引ける。しかし語頭の文字が変化する場合があり、その代表的なものがアラビア語で、たとえば動詞の語頭は人称や性によって変わる。書くという動詞について言うと、彼は書く(ヤクトップ)、彼女は書く(タクトップ) 貴方は書く(タクトップ)、私は書く(アクトップ)、私たちは書く(ナクトップ)など語頭の文字も変化するので、そのままでは辞書が引けない。もっと根本的なことは、アラビア語では、いろいろな単語は動詞の三人称完了形が基本となっている。書くという単語は、カタバ(彼は書いた)という動詞が

元で、それからキターブ（本）やカーティブ（作家）というような言葉が出てくる。マのついた単語は、それが行われる場所やものを意味し<sup>26)</sup>、カタバからマクタブ（机、事務所）やマクタバ（書店、図書館）になる。辞書も、マクタブという単語はカタバから引くことになる。

(d) 電子辞書：私の使用経験は少ないので、詳しいことはいえない。しかし紙の辞書に比べると、電子辞書は語数が少なく、文例も限られていて、不十分な気がする。私が電子辞書が紙の辞書に劣ると感じたのは、紙の辞書には出ている、英語の *decrier* という言葉が、パソコンで「スペル誤り」と出たことであった。しかし使い方によっては有用であろう。言語の辞書ではないが、ブリタニカ和訳の電子版<sup>27)</sup>を「宮中伯」という言葉の意味を調べたくて買ったが、目的には役立たなかったものの、簡単な百科事典として重宝している。

#### 4. 言語：心の小径

片言のオランダ語で「こんにちわ」といったら、「君はオランダ語が話せるのか」と相好を崩したアムステルダム空港の係官、下手なトルコ語で「ありがとう」といったら、とても喜んでいろいろサービスしてくれたドイツのトルコ系ファストフードの店主、片言の外国語を使ったらこんな風に反響が返ってきた。

ずっと昔になるが、旧制中学校の国語教科書に言語学者金田一京助氏の文章が掲載されていた。氏が樺太アイヌ語を調査に行ったときの話で、樺太アイヌ語をまね、使うことによって人々の心がほぐれていく物語である。その題は、「心の小径」であったと思う。言語は、人の心の小径である。それを学ぶことによって、人々の心に少しでも入っていくことができよう。医史学も、人の心こそがその研究の基盤でないか。

#### 参考文献

（辞典は、私が持っている重要なものに限った）

- 1) 泉 彪之助「医史学における複言語主義のすすめ」、『日本医史学雑誌』51巻4号、2005年

- 2) アンリエット・ヴァルテール著、平野和彦訳『西欧言語の歴史』230頁、藤原書店、東京、2006年
- 3) 河崎靖、クレインス・フレデリック『低地諸国（オランダ・ベルギー）の言語事情』、大学書林、東京、2002年
- 4) ラファエル・ラベサ著、中岡省治・三好華之助訳『スペイン語の歴史』、昭和堂、京都、2004年
- 5) 伊藤太吾ほか『スペインの言語』、同胞舎、京都、1996年
- 6) 長南実訳『エル・シードの歌』、岩波文庫、1998年
- 7) 黒田龍之助『ロシア語のしくみ』、白水社、東京、2006年
- 8) 田澤耕『エクスプレス カタルーニャ語』、白水社、東京、2001年
- 9) 桜井隆『エクスプレス オランダ語』、白水社、東京、1998年
- 10) 秋山余思『入門イタリア語』、白水社カセットボックス、1971年
- 11) Ricard Lobo: *Petita història d' Arnau de Vilanova*, Editorial Mediterrània, Barcelona, 1999
- 12) 田澤耕『物語 カタルーニャの歴史』、中公新書、2000年
- 13) 金指久美子『チェコ語のしくみ』13頁、白水社、東京、2007年
- 14) 島岡茂『フランス語の歴史』84頁、大学書林、東京、1993年
- 15) ノーム・チョムスキー、福井直樹・辻子美保子訳『生成文法の企て』、岩波書店、東京、2004年
- 16) 泉 彪之助「サラセミア考」、『日本医事新報』2614号、1974年6月
- 17) 泉 彪之助「訳注」、マッシー夫妻著、三浦朱門他訳『旅路』、双葉社、1978年
- 18) Dirckx, J. H.: *Hybrid Words in the Medical Terminology*, JAMA 238 (19): 2043-2045, 1977
- 19) Breyer, H.: *Max von Pettenkofer*, S.Hirzel Verlag, Leipzig, 1985
- 20) Lidell-Scott: *Greek English Lexicon*, 出版社、出版年失記
- 21) *Oxford Latin Dictionary*, Oxford University Press, Oxford, 2000
- 22) *Diccionario de la Lengua Española*, Real Academia Española, 2001
- 23) 『小学館ランダムハウス英和大辞典I~IV』、小学館、東京、1973年~1976年
- 24) 泉 彪之助「金沢市立図書館蔵『中津バスタード辞書』について」、『北陸医史』28巻1号、2007年
- 25) 鐘ヶ江信光『中国語辞典』、大学書林、東京、1989年
- 26) 宮本雅行『はじめてのアラビア語』159頁、講談社現代新書、2003年
- 27) シャープ電子辞書PW-C8000